

2015年度第3号のレター発行となります。本号では、2016年3月19日(土)に東京未来大学にて開催されました「第43回支部例会」での発表要旨、並びに、同日に執り行われました「2015年度関東支部総会」における決定事項を掲載致します。

日本比較文化学会関東支部事務局長 郭 潔蓉

◆第43回 関東支部研究例会 ご報告◆

2016年3月19日(土)、東京未来大学 本館・会議室1において第43回関東支部例会が開催されました。当日は5名の会員による研究発表が行われましたが、各発表において積極的な意見交換がなされ、大変有意義な例会となりました。以下、例会での研究発表の要旨を掲載致します。

◆開会の挨拶： 関東支部長 近藤俊明（東京未来大学）

1. 基礎英語リメディアル教育と国際理解：教員の役割について

東海大学 准教授
高橋 強

今回の発表では、国際理解教育についての理論と、その教育が目指すものを中心とし、基礎英語教育、つまり英語のリメディアル教育に、その理論をどのように取り入れ活用し、インタラクション活動につなげていくかということ述べるものとする。そこで、初めに、様々な国際理解教育論者の定義を考察し、グローバルな視点に立った国際理解教育並びに多文化理解教育のあり方等について詳細に述べることで国際理解教育の重要性を説き、授業実践では、教員主導の重要性を提唱し、比較文化型学習ならびにコミュニケーション型学習を授業で取り入れ、如何にして国際理解につなげていくことが出来るのかをのべることにする。さらに、協働型の授業で、人との関わり、自己形成、自尊心を植え付け、社会とどのように関わり、学習者が国際理解についての初歩的な英語を理解し、多文化への寛容な態度を身に付けることが出来て、相互理解を深めることが出来るのかについて考察し、自国文化と多文化の違いを互いに認め合い、初歩的な観点から国際理解に貢献できる人材を育成について発表する。

2. 朝鮮美術展覧会における「郷土色」に関する一考察

山梨英和大学 准教授
李 尚珍

朝鮮美術展覧会は、1922年の第1回から1944年の第23回まで、戦時中の物資調達の不自由ななか、毎年開催されていた。その目的は、文化・芸術領域の統制及び管理を強化し、体制的プロパガンダとして〈展覧会〉を開催することによって、朝鮮総督府のメッセージの伝達と政治的効果を図ったことにある。一方、朝鮮の新聞媒

体と作家たちは朝鮮総督府の意図を認識しつつ、「公平」「審査の厳密さ」を訴えながら、「社会的・文化的啓蒙の機会」、「芸術力育成の場」、「近代化表象の空間」として受け入れていた。

その中で、作家と審査員の間には絶えず、「純朝鮮のもの」、「地方色」、「ローカルカラー」、「郷土色」など、作風に関する議論が展開されていた。

ここで報告者は、女流作家羅蕙錫が「郷土」という言葉に「朝鮮特殊の表現」の「パワー」を認識していた(1924年)ことの意味を考えることから、日本人審査員らが言っている「地方色」、「純朝鮮もの」、「郷土色」などが朝鮮人作家らの認識とかけ離れていたことに注目したい。

3. 畔上賢造における異文化接触

早稲田大学国際言語文化研究所 招聘研究員
小林竜一

内村鑑三が近代日本を代表する知識人であることは論を俟たない。内村が研究対象としての価値をもち、内村の言動がアカデミックな検証に耐え得るものであるという点については膨大な先行研究の蓄積に示されているとおりでである。

また、藤井武、矢内原忠雄、塚本虎二、金沢常雄、三谷隆正、黒崎幸吉といった内村の弟子筋がアカデミズムにおける研究対象としての地位を築きつつあるという点についても昨今の研究動向に示されているとおりでである。

ところが、内村の衣鉢を継ぐ高弟のひとりであり、上に示した6名とともに内村の精神を継承した畔上賢造に関しては、どういうわけか先行研究の蓄積が皆無に等しい状況である。無論、畔上が研究に値しない対象であればそうした状況は何ら怪しむに足りないところではあるが、従来の研究者が畔上の研究対象としての価値を正當に評価できていなかったという可能性も決して絶無ではないように思われる。

本発表では、従来の研究者から冷淡に扱われた畔上という研究対象の〈不遇〉を踏まえつつ、英米文学から浄土教に至るまで、広範な関心を持っていた畔上という人間の異文化接触の諸相を分析することにより、研究対象としての畔上の可能性を追求したい。

4. 教育内容の違いが及ぼす印象評価への影響

— 絵本表紙絵の印象評価を手がかりに —

湘北短期大学 講師
森崎 巧一

本研究は、造形表現を扱っているが教育内容の全く異なる二つの学科(湘北短期大学保育学科及び情報メディア学科)の学生を対象に、絵本表紙絵(猫が登場する絵本の表紙絵)から受け取る印象を調査し、両学科の学生の印象特徴を比較した結果について報告するものである。学生36名(保育学科(1年生9名、2年生8名)、情報メディア学科(1年生10名、2年生9名))から、絵本表紙絵に対する印象評価データを収集し、得られたデータに主成分分析を施した。その結果、1年生では両学科の印象特徴に相違性があまり見られなかった。

しかし、2年生では両学科の相違性が目立った。保育学科は、絵本を使って子どもたちに実際に話を伝える実習等の表現伝達に力点が置かれた教育を受けていることに対し、情報メディア学科はCGや映像、アニメーション等の表現技術の習得に力点が置かれた教育を受けている。そうした教育内容の異なる2年間の学習経験が、絵本表紙絵に対する印象評価にも影響していると推察した。

5. 寺院法会にみる神

新島学園短期大学 准教授
高山 有紀

古代より、寺院法会に諸神を勧請し、法会が無事結願するよう願うのはごく一般的な光景である。「お水取り」で知られる東大寺二月堂の修二会においても、大導師が勧請した諸神の名前を読み上げる「神名帳」がよく知られている。寺院に神が招かれるのは、「神仏習合」思想の影響ともいえるが、法会の重要な場面で神を勧請する行為には、場を清浄にし、法会の威儀を整える、という意味があるように考えられる。

本報告では、室町時代の興福寺の寺内法会において、さまざまな場面で記される神に関する情報を取り上げ、検証していく。僧侶たちはどのような時機に何の目的で神のもとを訪れるのか、また神はいかなる手つづきで特定の場所に招かれることになるのか、神がその場に宿ることが僧侶たちにとってどういう意味を持つのか、等について史料を通して考えていく。

◆閉会の挨拶： 関東支部副支部長 高橋 強（東海大学）

* 閉会后、2015 年度関東支部総会を開催した。

◆2015 年度 関東支部総会 ご報告◆

(1) 総会開会の辞 議長 近藤 俊明（東京未来大学）

(2) 2015 年度会計報告 関東支部事務局長 郭 潔蓉（東京未来大学）
会計報告の詳細は、後日学会HPIに掲載予定。

(3) 2016 年度人事案 関東支部長 近藤俊明（東京未来大学）
以下の役員人事(案)を総会にて審議し、承認を得られた。

支部長	近藤 俊明（東京未来大学）
副支部長	花澤 聖子（神田外国語大学） 高山 有紀（新島学園短期大学） 高橋 強（東海大学）
事務局長	郭 潔蓉(カク イヨ)（東京未来大学）
支部指名理事	佐藤 知彖（湘北短期大学）
支部推薦理事	高橋 強（東海大学）
紀要編集委員	鈴井 宣行（創価大学）
紀要編集委員補助	金塚 基（東京未来大学）
会計監査	三浦 幸子（都留文科大学）
支部幹事	太田 敬雄 野口 周一 前田 浩 鈴井 宣行 水島 孝司 森崎 巧一

ハラスメント委員 水島 孝司（南九州短期大学）
三井 真紀（九州ルーテル学院大学）

(4) 2016 年度活動計画 関東支部長 近藤俊明（東京未来大学）

- ① 全国大会 2016 年 5 月 21 日(土) 於弘前学院大学
- ② 関東・東北合同支部例会 2016 年 9 月(予定) 東北にて開催
- ③ 関東・関西支部例会 2016 年 12 月(予定) 関西にて開催
- ④ 関東支部例会 2017 年 3 月(予定)

(5) 会則他 関東支部長 近藤俊明（東京未来大学）

- ① 以下の支部会則の改訂(案)が審議され、承認を得られた。

旧:「8. 会費」

新:「8. 会費」－「運用の覚書」項目の追加

「運用の覚書」:年度末の 1 月～3 月入会の場合、試行期間としてその年度の会費 1,000 円は請求しない方針とする。但し、発表を年度内に行う場合は、原則として徴収する。

以上

* 総会終了後、懇親会を開催した。